



Title	強欲説の帰結
Author(s)	濱田, 康行
Description	巻頭言
Citation	しんくみ, 57(3), 2-3
Issue Date	2010-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42795
Type	article
File Information	hamada_shinkumi.pdf



〈金融規制法〉

世界金融危機の原因とされているものの中に“強欲”がある。英語では **Greed** で異常な、かつ過剰な欲望のことである。これを犯人だとするのは、いささか情緒的にすぎ学問的にはかなり問題なのだが、素人受けはする。「自分達の会社は倒産させておいて数十億円の退職金をもらうなんて」とんでもない。超高層の高級フラットに住み豪勢な生活をしている。そのくせ、何をつくるでもなく、ただお金の操作だけをしている。とんでもない連中だ、というわけである。

この一般受けする説明がついに金融規制に帰結した。オバマ大統領にしてみれば、就任一年でかなり下降した支持率をなんとかしたい。そのためには大衆受けの良い金融規制が手頃な手段。マスコミも大衆迎合だからこれを支持。かくして事態は規制一色へ。

ところがである。この傾向、方向は、これまで苦勞してつけてきた路線とは正反対。1999年にグラス・スティーガル法を廃止して以来、金融業は統合してやる方向に進んできた。

今度の法案の中味をみると、商業銀行（つまり普通の銀行）にデリバティブスをやらせない、ヘッジファンドに手を出させない、つまり“銀行のギャンブル禁止”なのだ。それで、いいじゃないか、と思われるかもしれないが、ちょっと待て。ギャンブルといえば聞こえはよくないが、金融機関に利益が生じるのは何らかの形でリスクを引き受けることの見返りなのだ。金融論の教科書にはそう書いてあるし、それはリーマンショックの後も一行も訂正されていない。だからこの説明は今のところ妥当なのだ。そうなると、金融機関の持つテクニック、金融技術が発展すれば、扱いうるリスクの範囲も拡大し、それによって彼らの得る利益が大きくなるのは一連の因果であり、そこに技術や知識の進歩が認められれば、これは進歩なのである。

〈タイガーウッズ？〉

強欲を抑える規制といえば聞こえは良いから、反対しづらい。しかし、もし規制が進歩を止めることになるとしたら、それは規制の暴走なのである。経済の構造はとても繊細なもので、そこに人工的な規制を持ち込む時は、それこそ最新の注意が必要だ。やや異常と診断されたタイガーウッズが病院に入って治療するという話とは全然違うのである。

銀行と証券の間の壁は人為的に立てたものである。それを取り払うのは人為的にあったものを自然に帰すこと、だから規制緩和という表現もそれ自体が人為的な響きがありしっくりこない。あるべき姿にするだけのことだ。

経済と政治の間にはもっと高い、しかも自然の壁が立っている。これを自為的に乗り越えようとするとは概して良いことにはならない。だから、政治的な判断で、しかも大衆迎合的な判断で経済に手を入れようとするのは危険である。現に、法案が発表されてから数日間、ニューヨークの株式は“失望”で下げ続けた。

〈ポピュリズム〉

日本でも無理やり、政治が経済に介入して、万事具合が悪くなった例がある。それは、昨年成立した中小企業金融円滑化法である。どういういきさつかは知らないが、モーレツな実行力のある大臣の発案ということになっている。それはともかく、金融機関が貸すか貸さないかは経営判断である。貸付は金融機関の中心商品であり、その製造と販売の自由は完全に保証されねばならない。この法案はそれを“規制”しようというのである。こんなメチャクチャな法案がすんなり通ってしまう背景には、アメリカと同じように大衆迎合の論理がある。それは、世界金融危機で中小企業は困っている、大企業ばかり救わないで中小企業対策もなんとかしてくれ、という民の声だ。誤解のなきよう言うておくが、この民の声はホンモノだ。多くの中小企業が苦しんでいる。しかし、その声への対応として出てきた（というより突然思いついた）この法案は間違っている。

この間違いに、さしたる反論もないのはなぜか。最大の要因は、国会の議論の中に金融世界の論理が正しく反映されていない、同じことだが議員の皆さんが、もちろん全員ではないが金融オンチなのである。第二の要因はしかるべき中小企業政策がとられていないことだ。そこに隙間があるから、やや乱暴な政策が入り込んでしまうのだ。

〈ヤレヤレ！〉

困ったことに、この法案の成立を喜んでいる人々もいるが、そこには触れないでおこう。金融機関は、この馬鹿げた法案のために何と体制整備をしなければならないし、お役所に報告もしなければならない。金融検査では返済猶予を求められ“できる限り”の努力をしたかどうかを重点項目で調べるのだそうだ。

金融界はリレバンという妙な時代をようやくくぐり抜けた。お客と仲良くするという当り前のことを“強制”するという政策があった。今度は、融資の判断に介入する。困ったことだ。早く大人になった金融界をみたいのだが、それはいつのことだろう。